



Ⓐグループ農夫の会のメンバーと稲村代表（右端）
 Ⓑ刈り取った稲を天日干しする「稲杭掛け」の風景。1千本の稲杭が規則正しく並ぶ



十数年前、大蔵の棚田は、荒廃の危機にひんしていた。過疎化や耕作者の高齢化により、地元住民だけでは維持管理が難

くなくなったためだ。一時は約7割が耕作放棄に近い状態となった。会の代表を務める稲村和之さん（69）は「美しい棚田を後世につなげるためには、外部の力も借りる必要がある」と考え、2011年に同会を結成した。

会員はインターネットなどで募集し、毎年70～100人程度が県内外から集まる。地元の生産者団体「中地区有志の会」の協力を得ながら、年間を通じて、棚田での米作

て販売する「モンテ棚田米」と「山響棚田米」も好評だ。

棚田を活用した会員と地元住民の交流イベントも定期的に催している。昨年9月には、東北初のプロ楽団である山形交響楽団を招き「棚田でピクニックコンサート」を開いた。親子連れも多く参加し、農道にブルーシートを広げて生演奏の心地よい音楽に耳を傾けた。

コロナ禍でも楽しめるイベントとして好評を博したピクニックコンサートの様子を携わってもらおう。

美しい棚田を後世に!!

年間通じ会員が米作りに協力

米の売り上げは年間約500万円に上るが、イベントの開催経費や地域貢献活動にかかる費用にもまわすため、「事業自体は毎年若干の赤字です」と稲村さんは笑う。

それでも、「住民180人ほどの限界集落に、毎年たくさんの人が訪れてくれている。それだけでもありがたい」と手ごたえも感じている。

「今後は若い作り手を確保する必要がある」と稲村さん。同地域での農業が経済的に成り立つことを証明するためにも、「棚田米のブランド力をさらに高めていきたい」と意気込みを語る。



荒廃した棚田再生 限界集落が元気に

山形県南東部に位置する山辺町。同町大蔵地区を拠点に活動するボランティア団体「グループ農夫の会」は、荒廃した棚田の再生事業に取り組み、集落ににぎわいと交流を生み出している。

同地区には、1999年に日本の棚田百選に選ばれた「大蔵の棚田」（3・4畝）が存在する。同会はこのうち計2・6畝の棚田を借り受

昔ながらの農法でブランド米 会員募り定期的に交流

昔ながらの稲杭掛け天日干し乾燥する農法でブランド米「大蔵棚田米」を栽培している。贈答品として取り扱われることも多く、ハレの日に食べる米としてブランドイメージが定着しつつある。地元のプロ



サッカーチーム・モンテディオ山形や山形交響楽団とコラボレーションし

「今後若いうちから米の産地として定着させたい」と稲村さん。同会では、毎年70～100人程度が県内外から集まる。地元の生産者団体「中地区有志の会」の協力を得ながら、年間を通じて、棚田での米作

て販売する「モンテ棚田米」と「山響棚田米」も好評だ。

棚田を活用した会員と地元住民の交流イベントも定期的に催している。昨年9月には、東北初のプロ楽団である山形交響楽団を招き「棚田でピクニックコンサート」を開いた。親子連れも多く参加し、農道にブルーシートを広げて生演奏の心地よい音楽に耳を傾けた。

コロナ禍でも楽しめるイベントとして好評を博したピクニックコンサートの様子を携わってもらおう。